

普及・育成・強化に関わる“何か”とは…

～岐阜県のフェンシング競技実態調査から～

岐阜県立大垣北高等学校

高橋英彦

1 はじめに

近年、フェンシング競技における日本人選手の世界レベルでの活躍が目立っている。ロンドンオリンピックにおいては、フルーレ男子団体戦において銀メダルを獲得するに至った。フェンシング発祥の本場ヨーロッパの選手に対し、歴史の浅い日本の選手の活躍は特筆すべきものである。これは、一部エリート選手の集中的強化というフェンシング協会の方針が実を結んだとも言えるが、高校年代においてはフェンシング競技の競技人口は2,463人と未だ少ない。しかし今後は、2020年の東京オリンピック開催を契機に、さらなる普及にも力が入れられていくものと思われる。

本県は、昨年度「ぎふ清流国体」のフェンシング競技において、天皇杯（前人未到の5年連続）・皇后杯獲得を果たした。その競技力は、高校総体・高校選抜大会等の全国大会においても高いレベルを保っている。その強さの要因を探ることにより、フェンシング競技のみならず運動部活動の普及・育成の一助としたいと考え、本研究を始めることにした。

2 研究の進め方

競技者と指導者にアンケートを実施し、その意識や現状を把握する。また、取り巻く環境を調査することにより、普及・育成・強化について考察していく。

〈調査方法〉

- (1) 調査時期 平成24年11月～平成25年6月
- (2) 調査対象 平成24年度 県内登録者

| | 人数 |
|-----|-----|
| 小学生 | 28 |
| 中学生 | 18 |
| 高校生 | 100 |
| 大学生 | 48 |
| 一般 | 47 |
| 合計 | 241 |

- (3) 調査内容 「アンケート調査」・「聞き取り調査」

3 アンケート調査結果

- (1) 調査回答数

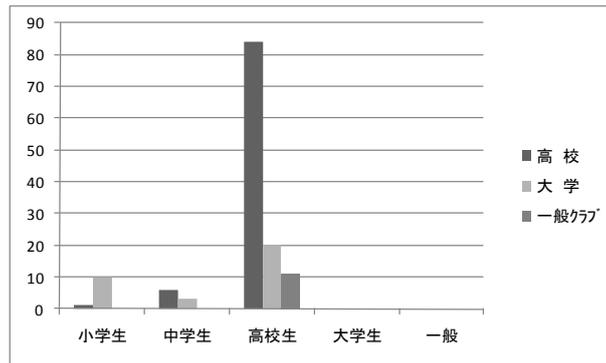
| | 団体数 | 競技者 | 指導者 | 合計 |
|---------|--------|-----|-----|-----|
| ジュニアクラブ | 3 | 32 | 15 | 47 |
| (中 学) | (2) | | | |
| 高 校 | 5 | 91 | 10 | 101 |
| 大 学 | 1 | 33 | 2 | 35 |
| 一般クラブ | 2 | 11 | 2 | 13 |
| 合計 | 11(13) | 167 | 29 | 196 |

高校における教員（フェンシング経験者）配置は、羽島北3人・大垣南3人・揖斐2人・岐阜各務野1人（以上県立）・鶯谷0人（私立）となっており、一校あたりの指導者数が多い。岐阜県開催のインターハイ・国体に伴い、高校教諭の採用が増え、フェンシング部のある学校へ複数の教員が配置されるようになった。また、ジュニアクラブにおいては競技者に対する指導者数が多い。

- (2) 競技者向けアンケート調査：対象167人

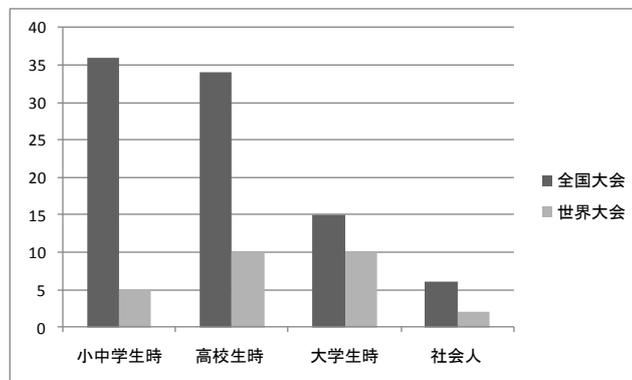
①フェンシングを始めたのは？

高校生以上の競技者（135人）の85%（115人）がフェンシングを高校から始めている。
競技歴の浅い選手が多い。

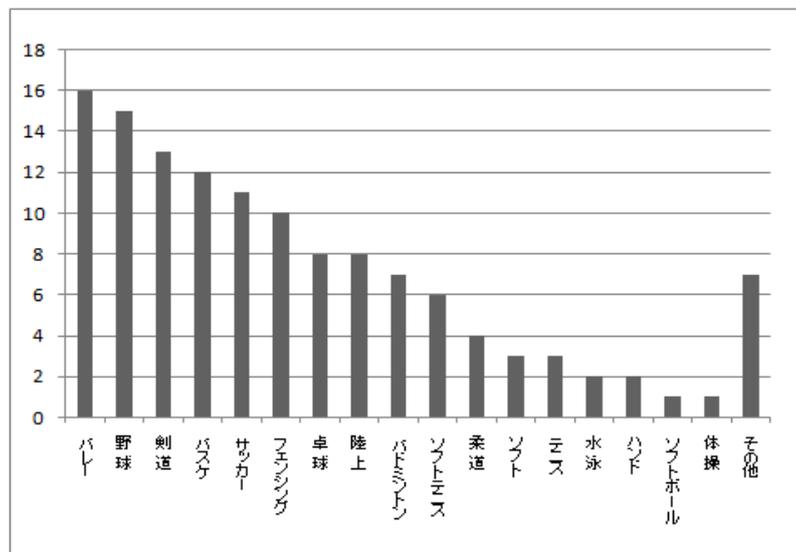


②個人及び団体の最高戦績は？

全競技者（167人）の25%（41人）が小学生時に「全国大会・世界大会出場」を経験し、高校生以上の競技者（135人）の33%（44人）、大学生以上の競技者（44名）の75%（33人）がそれぞれ「全国大会・世界大会出場」を経験している。

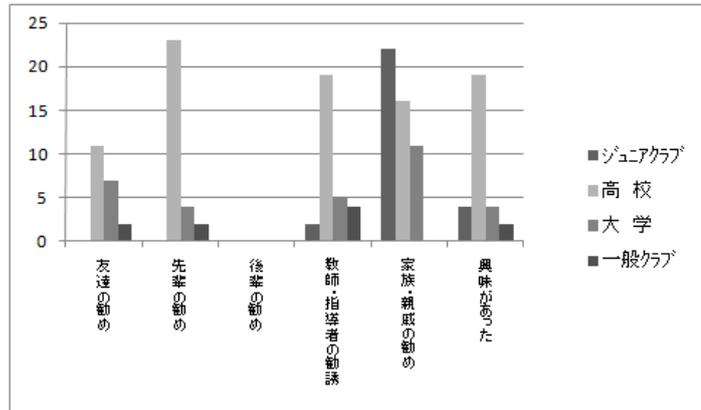


③中学生時の部活動は？（高校生以上）



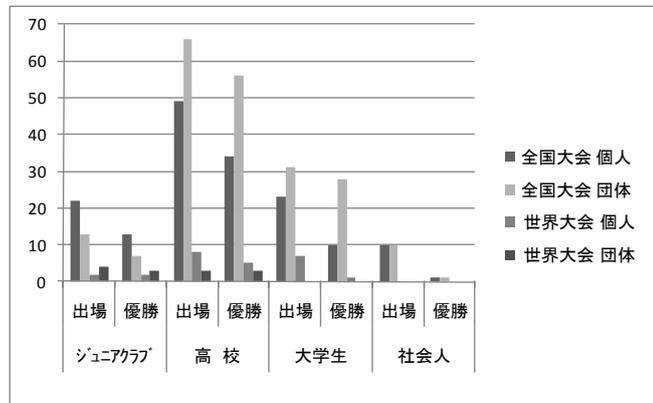
④フェンシング（部）を始めた一番大きな理由は？

始めた理由は「教師・指導者・家族・親戚などから誘われたり、勧められた場合」が多い。（全体167人中の79人）



⑤フェンシング（部）での目標は？

全カテゴリーにおいて「個人・団体ともに全国大会や世界大会優勝」と高いレベルを目標にしている。



⑥フェンシング（部）を続けている一番大きな理由は？

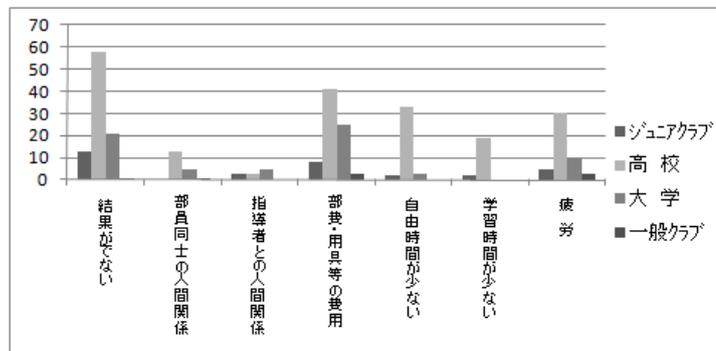
続けている理由は「フェンシングが好きだから」が一番多く、高校生では「インターハイや国体・選抜大会等で結果を出すため」が多い。

⑦フェンシングをして良かったのは？

良かったと思えるのは、様々な大会に出場し「チームが勝ったとき」「自分自身が活躍できたとき」である。

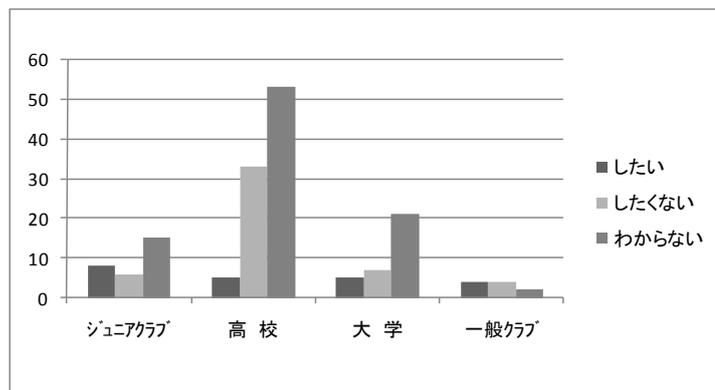
⑧フェンシングで苦労していることや困っていることは？

苦労している・困っていることは「戦績で結果がでない」「部費・用具等にお金がかかる」ことである。初年度に平均10万円～12万円（マスク、エフフォーム、ウェア、グローブ、シューズ、プレート等）の個人経費がかかる。



⑨将来、フェンシングの指導をしたいか？

全体の 40.7% (68 人) が「フェンシングを続けていこう」と考えており、全体の 13.2% (22 人) の選手が「指導者を希望」している。ジュニアクラブでは、29 人中 8 人 (27.6%) が「指導者を希望」している。



(3) 指導者向けアンケート・聞き取り調査：対象 29 人

①フェンシングを始めたのは？

全指導者の 82.8% (24 人) が高校からフェンシングを始めている。

②フェンシング (部) の指導を始めた一番大きな理由は？

「自分の専門種目であるから」が多く、次に「他の教員、指導者からの依頼、または勧誘があったから」となっている。

③指導歴は何年か？

平均指導歴：8.7 年 (最高：31 年、最低：1 年)

ジュニアクラブの指導者は「指導歴が短い」が、高校以上の指導者は「平均指導歴が 10 年以上」と長い。

④指導者の平均年齢は？

平均年齢：40.9 歳 (最低年齢：19 歳、最高年齢：58 歳)

全指導者の 62.1% (18 人) が 40 歳以上である。

⑤個人及び団体の最高戦績は？

指導者 29 人中 24 人 (82.6%) が選手として「全国大会を経験」し、8 人 (27.6%) が「世界大会を経験」している。また「全国大会での優勝経験者」は 9 人 (31.0%) おり、経験してきた競技レベルは高い。

⑥部員の勧誘はどのようにしているか？

◇大学

・朝日大学 ⇒全国大会へ行き、スカウト活動をする。

◇高校

- ・羽島北 ⇒体験させ、先輩方の話をする事で魅力を感じさせる。
見学期間や体育授業時を利用して、声かけをしたり勧誘案内を配る。
- ・大垣南 ⇒入学式の時に部員や教員が声をかける。
体育授業で身体能力が高い生徒に声をかける。
- ・鶯谷 ⇒新入生全員に入学式で勧誘案内を配布し、歓迎会で実演をする。
- ・揖斐 ⇒中学時の実績等を調べ声をかける。部員等と一緒に見学してもらう。
- ・岐阜各務野 ⇒中学校を訪問し競技の説明を行う。一日入学時に体験してもらう。

◇ジュニアクラブ

- ・羽島モア ⇒公民館等に募集のポスターを掲示する。
- ・養老クラブ ⇒部員が声かけをして体験会を開く。勧誘案内を小学校へ配布する。
- ・大垣ジュニア⇒ホームページで紹介や案内を掲載する。

※部員勧誘は直接声をかけ、体験させる場合が多い。また、勧誘案内の配布やポスター

の掲示、ホームページでの案内など各団体で工夫を凝らしている。

⑦練習はどの程度実施しているか？ 休養はどの程度設定しているか？

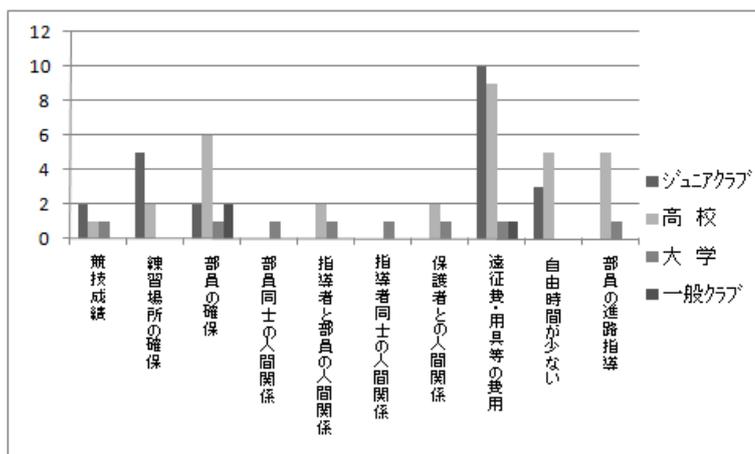
どのチームも「平日・休日とも2～3時間の練習」をしている。高校は朝練を実施している学校が多い。休養は、高校が「無休か週1日休み」となっている。

⑧フェンシング（部・クラブ）の目標は？

どのカテゴリーの指導者も「全国優勝」を目標にしている。一般個人は「世界優勝」を狙っており、目標設定のレベルは高い。

⑨フェンシングの指導で苦労していることや困っていることは？

指導で一番苦労していることは「遠征費・用具等にお金がかかる」で、次は「部員の確保」「練習場所の確保」となっている。



(4) その他

◇朝日大学

- ・県内の大学でフェンシング部があるのは、朝日大学だけである。
 - ・一般開放は、大学にフェンシング部が創設された12年前から続いている。対象は、(幼)・小・中・高・一般で週一回行っている。(参加費無料)
 - ・練習場所や練習相手を提供し、競技の普及・強化のサポートをしている。
- ※常設ピスト：6面

◇後継指導者

- ・競技者は県外へ進学しても岐阜県へ戻る場合が多い。その理由として、フェンシングが続けられる練習場所や企業クラブの存在、また練習相手がいることが挙げられる。そして、その競技者たちが次世代の指導者へと育っていく。

◇ジュニア層への普及活動

- ・中学校への出前講座を行っている。
- ※主催：各高校（国体開催時は各市町も）
- ※内容：長期休業等を利用し、競技の実演を交えて紹介等を行う。
- ・経験者や指導者の子どもが選手となり活躍している。

4 結果の考察

(1) 岐阜県のフェンシング

スポーツにおいて、その競技の維持・発展のために「普及」「育成」「強化」のシステムを確立することと、そのバランスを考えることが重要であるが、本県のフェンシング競技に当てはめてみると、以下のような事が言える。

◇普及

ジュニアクラブ数は『2000年ぎふ総体』時は1クラブしかなかったが、現在では3クラブとなり、小・中学生の競技者数は増加している。ジュニアクラブの指導者は経験ある社会人指導者が多く、選手は充実した内容の指導を受けている。そして、そ

の指導者の多くが女性で、勝利至上主義に走ることなく、母親目線から礼儀や基本的生活習慣についても懇切・丁寧に指導を行なっている。また、県フェンシング協会も後進の指導者養成に力を入れており、その成果として教員となる指導者も多く、今後につながるバックアップを果たしている。現在、高校による中学校への普及活動が行われているが、高校での部員勧誘等を円滑にするためにも続けていかねばならない。

◇育成

高校においては、高い競技実績と指導力を持つ教員の複数配置が実現しており、県内の高校は全国レベルの競技力を維持している。今後は、ぎふ清流国体を契機に採用された選手たちが、若手指導者やベテラン指導者と交流し指導力を高めていくことが望まれる。

◇強化

ジュニアから一般までの指導強化システムが整ってきている。その中心となるのが強化拠点の朝日大学で、そこにはオリンピックをはじめ、各カテゴリーのハイレベルのフェンシング競技者が県外各地からも集っている。そして互いの切磋琢磨の中から、さらに技能を向上させる場となっている。また、その恵まれた環境が進学等で県外へ出た選手の受け皿となり、岐阜へ戻る動機づけになっている。これは、後進育成のためにも望ましい状況である。

(2) まとめ

◇全国大会を契機とした「普及」「育成」「強化」

岐阜県は「2000年ぎふ総体」・「2012ぎふ清流国体」での躍進をめざし、選手・指導者の育成・強化を図り、あわせて競技人口を増やしてきた。このようなビッグイベントは、普及・育成・強化の大きな契機となる。その意味において「2020東京五輪開催」は、日本にとってのビッグイベントであり、各競技における普及・育成・強化のビッグチャンスとなる。

◇大学の活用

現在、大学に対してチャンピオンシップスポーツのサポートから、ジュニア育成・シニアの健康づくりまでもが期待されており、それが「総合型地域スポーツクラブ」の一例となっている場合もある。大学が競技の普及・育成・強化の拠点として「スポーツ教室」から「トレーニングセンター機能」まで展開していくことを望みたい。

◇“何か”

本研究部は、平成18年度に『ホッケー競技における部員確保』をテーマに全国発表をしたが、その際本県の普及・育成・強化の拠点として「岐阜県グリーンスタジアム」の存在を挙げた。指導者の能力と不断の努力によって、高い競技力を築くことができても、その維持には普及・育成・強化のシステムと、他にはない独自の“何か”が必要だと思われる。そして、そのためには行政のバックアップも欠かせない。岐阜県には強化拠点施設として「スポーツ科学トレーニングセンター」があり、県の強化指定競技を中心にサポートを行っている。特にインターハイ・国体時には、動作・戦略分析の面で多大な貢献を果たしてきた。今回の研究で明らかになった朝日大学の存在とともに、その“何か”に当たるとと思われる。この狭い日本の中においても、粘り強い意志を持って地域独自の“何か”を探し、“何か”を創りあげていくことが、他県・他種目からの優位を図るために必須なのではないか。

5 今後の課題

- (1) 少子化の中での選手確保
- (2) 国体終了に伴う強化費削減対策
- (3) 遠征・用具にかかる費用捻出
- (4) 普及だけでなく強化を意識したジュニア育成の推進